



みみ

耳よい

いいメール

国立病院機構 相模原病院 広報誌
令和7年6月20日号
発行：国立病院機構 相模原病院
発行責任者：安達 献
住所：相模原市南区桜台18-1
電話：042-742-8311（代表）
FAX：042-742-5314

第93号



小田原城と紫陽花（2024）

第93号 目次

- ◆相模原病院に着任して 1
- ◆糖尿病・内分泌代謝内科のご紹介 2
- ◆睡眠に悩むすべての方へ
～診療科としての“睡眠外来”～ 3
- ◆相模原病院で大活躍！
病院救命士って何しているの？ 6
- ◆新たな一歩―地域医療連携室から
「患者・地域支援センター（PRSセンター）」へ... 7
- ◆コーヒーブレイク
【朝ドラ「おむすび」を観ながら、
ツッコミ入れつつ、ちょっと誇らしい】 8
- ◆耳よきな栄養だより 9
- ◆連載コラムQ&A コラム検査科 11
- 連載 近隣保険薬局紹介コーナー
「ヤマグチ薬局南台店」様 13
- 連載 近隣協力医療施設の紹介コーナー
「みずじゅんクリニック」様 14



「さがみサクラねっと」

インターネットを利用して、患者さんの多岐にわたる沢山の診療情報を地域の医療機関で共有し、地域で完結できる良質な医療の提供を目的としたシステムです。

相模原病院に着任して



看護部長 小山 陽子

ゴールデンウィークも終り、新緑が濃さを増し初夏の香りを感じる季節となりました。

4月1日付で国立病院機構甲府病院より赴任致しました看護部長小山陽子と申します。

実は、相模原病院には副看護部長として新型コロナウイルス感染症が蔓延していた2020年4月から3年間在職していました。日本中が大変な時期にここで勤務した3年間は、大変濃厚で最も印象深く残っている病院でした。そのため、またこうして相模原病院に戻ることができ、その時に大変お世話になりご協力頂いた相模原地域の皆様へ改めて医療貢献ができることを嬉しく思っています。

私は、今は看護部長という立場ではありますが、看護師になり30年以上が経過した今でも、看護の道を目指した頃からの看護師の使命を忘れないよう心がけています。そのため患者の皆様が治療に専念できる療養環境を整え、安心して心身ともに委ねることができる看護師育成を目指しています。

看護部は今年度も多くの新人看護師を迎えました。内定した新人看護師は全員が国家試験の難関を乗り越え合格することができました。初々しく目を輝かせ希望に満ちたその顔つきから、将来スキルアップした看護師に成長できるので

はと期待感でいっぱいです。また、多くの先輩看護師たちが熱心に新人看護師指導に携わっています。新人は先輩の巧みな看護の技に触れ、一生懸命に眼と耳を凝らして見聴きしている姿を見ると誇らしく思います。

当院は、国立病院時代から地域の皆様に愛され、馴染みのある病院です。世の中の社会情勢や医療提供体制に合わせ、当院も当時の医療機能とは変化しつつも、地域に根差した医療提供を大切にしていくという精神は変わりません。今後も地域の皆様への丁寧な医療・看護の提供を目指し、末永く愛される病院として存続していきたいと思っています。

看護部からこうして時々情報発信をさせていただきますので、どうぞ楽しみにしてください。これからも相模原病院をどうぞ宜しくお願い申し上げます。



糖尿病・内分泌代謝内科のご紹介

糖尿病・内分泌代謝内科部長 守屋 達美

私は、2025年4月から糖尿病専門医として相模原病院に勤務しています。この3月までは北里大学病院で30年以上糖尿病及びその合併症（特に腎臓合併症）の診療に勤しんでまいりました。

糖尿病は、一口で申し上げると血糖値が高くなる病気ですが、それ以外にもコレステロールや中性脂肪などが高値になる脂質異常症を高率に合併し、脂肪肝や高血圧なども並存することが多いです。さらには、糖尿病網膜症や腎症などの慢性合併症を伴い、心臓や脳の動脈硬化に基づく虚血性心疾患や脳梗塞なども合併することもしばしばです。すなわち、糖尿病は血糖値が高いだけではなく、全身的に様々なことが生じる疾患と言っていると思います。

近年高齢化が進み、それに伴い、糖尿病の頻度も増加しています。40歳以降には4人に一人が糖尿病かその予備軍とされています。予備軍の方々は放置していると、糖尿病になります。糖尿病を放置しますと、上記したような慢性合併症を発症してきます。

糖尿病・内分泌代謝内科の役割は、糖尿病そのものを少しでも良い状態にすること、その結果として慢性合併症の発症を阻止することです。慢性合併症が発症してしまっている場合には少

しでも進行を食い止めること、良いコントロール状態にすることだと考えています。

相模原病院は、この20年以上糖尿病の常勤医がおらず、糖尿病の専門外来や専門病棟がありませんでした。そこで現在は、将来的に有機的な糖尿病診療が可能となるようにシステム作りを始めています。例えば、糖尿病診療は医師だけでは成り立ちません。単なる血糖コントロールだけではなく、全身的ケアができるような診療体制を目的として、看護師・管理栄養士・薬剤師・臨床検査技師他（以上順不同）の皆様と共に充実したチーム医療の構築を計画しています。さらに、糖尿病内科医だけではなく、循環器内科の先生方をはじめとする他科の先生方とのコラボレーションも進めていきたいと考えています。

また、非常に多くの糖尿病患者さんがいる現在、地域の先生方との病診連携、そしてより高次の医療ができる例えば大学病院との病病連携の構築も重要な点です。

近い将来に、相模原病院ならではの糖尿病診療を確立するために努力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

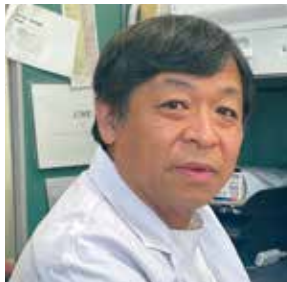
守屋達美：

1984年 北里大学医学部卒業。

主に北里大学病院糖尿病・内分泌代謝内科に勤務し、信州大学医学部病理学及びミネソタ州立ミネソタ大学へ留学、北里大学健康管理センター長・教授を経て、2025年4月から国立病院機構 相模原病院 糖尿病・内分泌代謝内科部長に就任。

資格：日本内科学会内科認定医・総合内科専門医、日本糖尿病学会専門医・指導医

睡眠に悩むすべての方へ ～診療科としての“睡眠外来”～



日本睡眠学会総合専門医・指導医・専門心理師
日本呼吸器学会専門医
内科部長 山中 隆夫

当院では、2021年度より「睡眠外来」を開設し、日々多くの方の「日中がつらい」「いびきがひどい」「眠れない」といったお悩みに対応しています。睡眠障害は60種類以上あるとされ、最近では睡眠障害と生活習慣病や精神疾患、さらには認知症との関連も注目されています。

睡眠に関わる疾患は国際的には以下の7つの枠組みで捉えられています：

- 1.不眠症
- 2.睡眠関連呼吸障害（例：閉塞性睡眠時無呼吸症候群〔OSA〕）
- 3.中枢性過眠症（例：ナルコレプシー）
- 4.概日リズム睡眠・覚醒障害
- 5.睡眠時随伴症（例：レム睡眠行動障害）
- 6.睡眠関連運動障害（例：レストレスレッグス症候群）
- 7.その他の睡眠障害

中でも近年注目されているのが、不眠症と睡眠時無呼吸症候群を併存する“COMISA (Co-morbid Insomnia and Sleep Apnea)”です。不眠症の約30%にOSAが、OSAの約30%程度に不眠症状がみられます。入眠困難や中途覚醒といった不眠症状を合併するもので、呼吸の不安定性や過覚醒といった原因や症状により、いくつかのタイプが知られています。COMISA は、

OSA単独に比べて、生活の質（QOL）や死亡率に約2倍、深刻な影響を与えることが知られています¹。

当院で対応可能な睡眠障害と主な検査

当院の睡眠外来では、以下のような症状に幅広く対応しています：

- ・寝つけない、夜中に目が覚める、起きられない（不眠症状・リズム障害）
- ・睡眠中の激しいいびきや呼吸停止（無呼吸・カタスレニア）
- ・昼間の強い眠気（過眠）
- ・睡眠中の異常行動（レム睡眠障害・夜驚症）
- ・足のムズムズ感や周期的な動き（周期性四肢運動障害）

これらに対して、次のような検査を実施しています：

■ポリソムノグラフィ（PSG）検査（入院型／ビデオ監視）

脳波・筋電図・眼球運動・呼吸・心拍など多項目を記録。

睡眠呼吸障害だけが疑われる患者様にはビデオ監視はしていませんが、レム睡眠行動障害やてんかん、周期性四肢運動障害などの診断にはビデオ付き入院型PSGが必須です。

■睡眠日誌/アクトグラフ

概日リズム睡眠障害や慢性不眠の不眠症状に対して診断補助に有用で、非侵襲的に長期間の行動パターンを把握できます。目立たない簡便な方法ながら、診断の信頼性向上に寄与します。

なお、過眠症に対しての、オレキシン髄液検査、反復睡眠潜時検査（MSLT検査）は必要に応じ、他院と連携して行っています。

OSAに対する総合的治療アプローチ ～CPAPとOAの適応判断～

閉塞性睡眠時無呼吸症候群（OSA）は成人男性の15～30%、閉経後女性の10%以上に見られ、心血管疾患・糖尿病・認知症を発症させることが報告されています²。治療法の選択は、単にPSG検査の結果の重症度だけではなく、解剖学的特性や患者のライフスタイルも踏まえて総合判断が必要です。（図1,2）

■CPAP（持続陽圧呼吸療法）

中等症～重症OSAにおける第一選択。治療により心筋梗塞・脳卒中・交通事故リスクの大幅な低下が報告されています³。

■OA（口内炎装置 【マウスピース】）

軽症～中等症OSAやCPAP不耐の患者に有効。特に下顎後退、小顎症など顔貌的問題のある日本人に適応が多く、当院では歯科と連携し、OA作製後に睡眠呼吸状態の改善やCTで気道体積を評価し、有効性を確認しています。（図3）

■気道の解剖学的評価と多角的スクリーニング

当院ではCTや咽頭内視鏡を用いた気道評価、舌位・鼻閉・口呼吸の有無を含む包括的評価を実施。適切なデバイス選択に活用しています。

COMISA、過眠、睡眠時随伴症、運動障害性睡眠障害に対する個別治療

■COMISA（不眠+OSA）

不眠が先行するCOMISAではCPAP単独では治療成功率が低くCBT-I併用が必須です。心理療法治療法を併用し、順応を妨げる過覚醒の評価と対応を行います⁵。

■過眠症（ナルコレプシーなど）

ナルコレプシーや特発性過眠症では覚醒促進薬（モダフィニル等）を使用します。睡眠スケジュールを整備し、生活のコントロールをしています。

■レム睡眠行動障害（RBD）

RBDでは、ビデオ付きPSG検査により異常な運動の有無と睡眠段階との対応を明確にし、鑑別を行います。治療は内服薬が第一選択とされており、転倒・外傷防止のための環境調整と併せて指導を行います。また、OSAの合併率が高く（15～40%）、また、CPAPがRBDの症状を改善させる例もあるため、当院ではPSG検査を行って診断しております。また、RBDはパーキンソン病やレビー小体型認知症など α シヌクレイン蓄積病の前駆症状として注目されています。これらの神経変性疾患との関連を見極める目的で、MIBGシンチグラフィによる心交感神経機能の評価や他検査を合わせて評価が有用とされており、当科で行っています⁶。

■周期性四肢運動障害（PLMD）

夜間に繰り返し脚がピクついて眠りが浅くなる病態で、診断にはPSG中の下肢筋電図が必要です。治療は内服薬でコントロールします。レストレスレッグス症候群との鑑別や併存を評価しながら、症状の改善を図ります。

最後に：質の高い睡眠が、人生を変える

睡眠は“回復”と“記憶・感情の統合”の時間です。眠れないこと、日中にだるいこと、いびきを指摘されたこと——それらは単なる「生活の一部」ではなく、体と脳からの重要なサインかもしれません。

当院の睡眠外来では、院内の耳鼻科・神経内科等の他科、近隣の歯科医院と連携し個々の状

態に合った最善の治療法をご提案します。どうぞお気軽に、地域のかかりつけ医の先生方を通じて当院睡眠外来をご活用ください。

「眠り」が変われば、「毎日」が変わります。ぜひ、あなたの睡眠についてご相談ください。



図1 減量による気道変化



図2 体位での気道変化

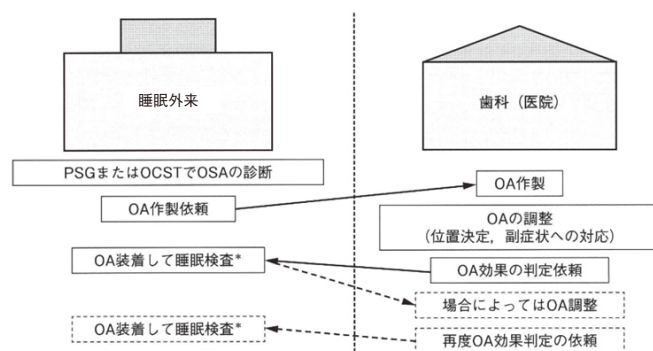


図3 医科歯科地域連携

【参考文献】

1. Sweetman A, Lack L, Catchside P, et al. Sleep Med Rev. 2021;55:101383.
2. Senaratna CV, Perret JL, Lodge CJ, et al. Sleep Med Rev. 2017;34:70-81.
3. Marin JM, Carrizo SJ, Vicente E, Agusti AG. Lancet. 2005;365(9464):1046-1053.
4. Sutherland K, Vanderveken OM, Tsuda H, et al. Thorax. 2015;70(11):1050-1057.
5. Zhou ES, Papp KK, Strohl KP. Sleep. 2017;40(1):zsw026.
6. Miyamoto T, Miyamoto M, Iwanami M, et al. Mov Disord. 2006;21(10):1610-1614.

相模原病院で大活躍！ 病院救命士って何しているの？

救急科 部長 細谷 智

救急救命士 小泉 博実

救急救命士の紹介

初めにこの記事を読んでいる皆さんに質問です。「救急救命士」と聞いて思い描くのはどのようなことでしょうか。「救急車に乗っている人」、「消防署にいる人」というのが第一印象の人が多いと思います。ほかに「救命救急士」と呼ばれることもあります……。それだけまだ知名度が少ない資格の一つだと思っています。

令和3年10月より救急救命士法が一部改正され、厚生労働省が定めた研修や院内体制を整えれば病院内（救急現場から入院もしくは帰宅するまでの間）でも処置が可能となりました。法改正を受け病院などでも救急救命士を採用する医療機関が近年増加してきています。

当院では救急救命士クリニカルラダーと院内教育プログラムで、十分な座学・技術試験を行ったうえで活動しています。

相模原病院救急救命士の概要

当院の救急救命士は診療部救急科に所属し、令和6年4月から3名の救急救命士が業務技術員として業務を開始し、令和7年4月からは7名の救急救命士が勤務しています。

業務としては、救急外来業務、救急業務に関わる事項、病院救急車運行業務や委員会などの事務的業務等を担っております。

業務概要**◆救急外来業務**

救急外来では救急救命士法で定められている範囲で診療の補助をおこなっています。

救急車やウォークインで来院された患者様への診療補助（バイタルサインの測定や検査）や処置検査を行う医療職への介助をおこなっています。

◆病院救急車運行業務

当院では病院救急車を運用しており、県内・県外の病院、クリニック等への病院間搬送業務

を地域連携室と連携を図りながら積極的に行っており、搬送業務のほかにも救急車の資器材や車両の管理（機器点検など）を救急救命士が担っております。

◆その他の業務

院内BLS【Basic Life Support：心配停止または呼吸停止に対する一時救命措置】コースのインストラクターやICLS【Immediate Cardiac Life Support：心停止に即座に対応する処置】の指導補助者として活動しています。

プレホスピタルケアを担う救急隊と病院内診療を円滑に行うためには、日頃からの連携が重要であり、お互いのコミュニケーションを取りやすい環境を整えることも救急救命士の役割と考え日々活動しています。

今後も、将来的な病院救急救命士像を想定した教育を行い、医療機関内で十分に通用する知識・技術を身につけていきます。



新たな一歩—地域医療連携室から 「患者・地域支援センター（PRSセンター）」へ

地域医療連携係長 室井 弘子

このたび当院では、これまで「地域医療連携室」として親しまれてきた組織を再編し、新たに「患者・地域支援センター（通称：PRSセンター）」としてスタートいたしました。

平成17年に地域連携担当部署が設置されました。平成23年には相模原市から地域医療支援病院に承認され、入退院管理室が出来ました。その頃のスタッフは12名（看護師4名、医療ソーシャルワーカー（MSW）6名、事務2名）でしたが、今では、医師4名・看護師11名・MSW9名・事務15名・薬剤師1名・放射線技師1名の総勢40名近いスタッフが、協力しながら活躍をしています。センター内は主に4つの機能に分かれており、

・**入退院管理室**（入院案内センター含）：入院前から退院後までの支援計画を調整、安心できる療養生活を支えます。

・**地域連携室**（予約センター含）：地域の医療機関・福祉機関と連携し、円滑な診療・紹介体制を築きます。受診相談などの前方連携・セカンドオピニオン・さがみサクラねっと事務局なども対応しています。

・**医療相談室**（がん相談支援センター含）：療養や介護、経済的な不安など、患者さんやご家族の様々な相談に応じます。

・**渉外広報室**：広報活動や地域への情報発信を通じ、病診連携・薬薬連携・医科歯科連携などを推進しています。

「PRSセンター」という新たな呼び名には、「Patient（患者） & Region（地域）Support（支援）」の頭文字です。またPRSのPRには、Public Relations「地域の医療機関や介護・福祉施設、住民との信頼関係を築き、病院の役割や強みを効果的に伝え活動する」も同時に意味していると考えています。PRSセンターは、相模原病院と地域を「つなぐ窓口」であり、信頼の窓口として、地域の皆さまと共に歩むセンターであり続けます。病院玄関には患者サポート総合相談窓口もあり、気軽にお声かけ頂けますと適切な部署へお繋ぎいたします。



コーヒーブレイク



【朝ドラ「おむすび」を観ながら、ツッコミ入れつつ、ちょっと誇らしい】

管理栄養士 藤田 かほる

管理栄養士の藤田です。

前作の朝ドラ

「おむすび」、

皆さんはご覧になりましたか？

主人公が病院の管理栄養士という、テーマでした。



最初は、思わずツッコミが止まらず……

「いやいや、管理栄養士＝ギャルちゃうし！」

「このモデル、誰がモデルなん？」「医師が管理栄養士にこんなこと言わへんで！」と、影響されやすいので関西弁でつぶやいていました。ちなみに私は普段、標準語で話します（今の朝ドラは高知県が舞台なので、土佐弁でつぶやきます）。

でも、観ているうちにだんだん嬉しくなってきました。

日本栄養士会が全面協力していたこともあり、現場のリアルさや、専門職としての描かれ方にきちんとした誠実さを感じました。

何より“食べること”と“生きること”をまっすぐに描こうとしてくれていたことが、観る側として心に響きました。

実際に病棟での栄養相談の際、「ドラマ観てますよ」「管理栄養士さんって、大変なお仕事なんですね」と声をかけてくださる患者さんも増えました。

中には「テレビの人みたいだね」と笑って言うてくださる方もいて、自己紹介の時に「私はギャルではないですよ」と返すと場が和んだりして。ドラマの力って、やっぱりすごいですね。

劇中では、NSTという【栄養サポートチーム】で多職種が連携しながら、一人の患者さんに向き合っていく様子が描かれていました。しかもそれぞれ、ちょっと誇張されたくらい個性豊かで、思わず笑ってしまうようなキャラクター設定。

「ずっと見ていたいイケメン言語聴覚士」「笑って！やけに熱血な薬剤師」「なんとなく頼も

しいNST医師」「美人でなんでもこなせる看護師」と、どこかに“いそうでない”、でも“いるかも？” “いたら嬉しい” 絶妙なラインで楽しめました。

「そうそう、これがチーム医療よ。医療現場なのよ。」と、思わず頷きながら観ていました。

最近の医療ドラマでは、薬剤師や放射線技師といったいわゆるコメディカルが主役になった作品もありましたが、「管理栄養士」が主人公になったのは、私の知る限りこれが初めてです。

ようやく私たちにもスポットライトが当たった、そんな感慨がありました。

とはいえ、管理栄養士は決して“表”で目立つ存在ではありません。

どちらかというと、私は“忍び”のような役割だと思っています。検査データをみて情報を集め、患者さんの状態を多方面から読み取り、必要なタイミングでそっと手を差しのべる。そんなふうに、静かに、でも確かに医療の一部を支えている存在——それが病院の管理栄養士だと思うのです。

当院でも、栄養評価や栄養食事指導、NST活動、献立作成など、管理栄養士が担う業務は多岐にわたります。“食べる”ことを通じて“生きる”力を支える、それが私たちの仕事です。

「おむすび」を通じて、「こんな仕事してるんだ」「“食”も治療の一部なんだね」と思ってくださった方がいたなら、本当にうれしい限りです。

ドラマは終わりましたが、私たちの“おむすび”は、これからも日々、患者さんのそばで静かに結ばれていきます。

もし病棟やデイルーム、入院案内センターなどで管理栄養士を見かけたら、「あなたは、ギャルじゃない管理栄養士さん？」と声をかけてください。会話が弾みそうです。

これからも皆さんの「食べる力」を、陰ながら支えていけたらと思っています。

耳よりな栄養だより

第3回：夏の栄養と健康 - 暑さに負けない身体づくり



栄養管理室長 藤田 かほる

みなさま、こんにちは。管理栄養士の藤田です。

夏が近づくと、気温と湿度が上昇し、私たちの身体は自然と熱を放出しようとしています。しかし、暑さに負けて夏バテになってしまうこともありますね。この回では、暑い季節を乗り切るための食生活と栄養管理についてお話しします。エネルギー補給や水分補給のポイントを押さえながら、暑さに負けない身体づくりを目指しましょう。

1. 夏に必要な栄養素とは？

夏は汗をかきやすく、体内の水分やミネラルが不足しがちです。そのため、特に注意したいのは**電解質バランス**と**エネルギー補給**です。

ナトリウム、カリウム、マグネシウムなどの電解質は、体内の水分を調整し、熱中症を予防する役割を果たします。これらのミネラルは、特に野菜や果物から効率的に摂取することが可能です。夏が旬のトマトやキュウリ、スイカなどは、水分とカリウムが豊富で、身体を内側からクールダウンさせてくれます。

次に、**ビタミンB1**が重要です。ビタミンB1は、身体がエネルギーを効率よく作り出すために必要で、夏バテ予防に役立ちます。豚肉や玄米、豆類に多く含まれ、エネルギー代謝をサポートします。食事にしっかりビタミンB1

を取り入れることで、疲れにくい身体を作ることができるとしています。

抗酸化物質も夏に欠かせません。紫外線が強くなると、体内の活性酸素が増え、細胞にダメージを与えることがあります。ビタミンCやビタミンE、カロテノイドが豊富な食品を摂ることで、身体を守ることができます。特に私は、トマトやパプリカ、オレンジなどの色鮮やかな野菜や果物を勧めています。これらは、紫外線によるダメージを軽減し、肌や身体の調子を整えるのに役立ちます。

2. 夏の食生活の工夫

暑い季節には、つい冷たい飲み物や食べ物を摂りたくなりますが、身体を冷やしすぎると逆に調子を崩してしまうことがあります。冷たい食べ物と温かい食べ物をバランスよく摂ることを推奨しています。冷えすぎた身体は、消化機能が低下し、栄養の吸収が悪くなる場合がありますので、食事の際にはスープや温かいお茶を取り入れることが大切です。

また、夏は特に**水分補給**が重要です。水分は汗と共に失われるため、こまめな水分補給が必要です。純粋な水だけでなく、適度にミネラルや電解質を含んだ飲料も取り入れることを勧めています。スポーツドリンクや麦茶、塩分を含む梅干しなどを食事に取り入

れることで、身体の水分とミネラルバランスを保つことができます。

3. 夏に食べたい食材

夏には特に旬の食材を意識して取り入れることで、自然な形で身体をケアすることができます。

****トマト****：ビタミンCとカリウムが豊富で、身体を冷やす効果もあります。抗酸化作用があり、紫外線によるダメージから肌を守る効果も期待できます。

****きゅうり****：90%以上が水分で、身体をクールダウンさせてくれる食品です。むくみの解消にも効果的です。

****スイカ****：カリウムが豊富で、身体の余分な水分を排出しつつ、適度に水分補給もできます。また、リコピンという抗酸化物質が含まれています。

****豚肉****：ビタミンB1が豊富で、夏バテ防止に役立ちます。簡単に調理でき、サラダや炒め物にしても美味しい食材です。

4. 夏バテ予防のための生活習慣

栄養のバランスを整えることに加えて、夏バテ予防には生活習慣も重要です。適度な運動やリラックスできる時間を持つことが、体力維持に役立ちます。特に朝や夕方の涼しい時間帯にウォーキングや軽いストレッチを取り入れることで、体調を崩しにくい身体づくりが可能です。

十分な睡眠も強調したいところです。夏は寝苦しい夜が続くことが多いですが、寝室を涼しく保ち、リラックスした状態で就寝することが

大切です。睡眠は、身体の回復とエネルギーのリチャージに不可欠な時間です。

いかがでしたでしょうか？これからの季節を快適に過ごすための工夫を、ぜひ実践してみてください。

～*～「食」は 人を良くする

「食事」は 人を良くする事～*～



連載コラムQ&A <気になる疑問にお答えします>

■コラム検査科

臨床検査技師長 武山 茂

細菌検査主任 安田 秀平

Q：臨床検査技師のお仕事を知っていますか？

A：病院を訪れた際、血液検査や心電図検査を受けた経験がある方も多いと思いますが、その検査の裏側で、私たち臨床検査技師がどのように関わっているか、ご存知でしょうか。臨床検査技師は、病気の診断や治療の方針決定を支えるため、正確で迅速な検査データを提供する専門職です。見えないところで、皆さんの健康を守るために日々努力を重ねています。

臨床検査技師の仕事

・採血業務

採血は多くの診療における第一歩です。患者さんに負担をかけずに、短時間で確実に血液を採取します。採血室では、緊張する患者さんに対して優しい声かけを行い、安全で正確な採血を徹底しています。採取した血液は、数多くの検査項目に使用され、診断に直結する重要なサンプルとなります。

・血液検査

血液検査では、赤血球、白血球、血小板の数や形、さらには肝機能、腎機能、血糖値、コレステロールなど、身体のさまざまな情報を測定します。貧血、感染症、糖尿病、肝疾患などの診断に欠かせない検査であり、患者さんの状態を把握するだけでなく、治療効果の判定にも活用されます。近年では迅速検査装置の導入により、検査から結果提供までの時間短縮も進んでいます。

・生理検査

生理検査は身体の機能を可視化する検査です。

心電図検査では心臓の電氣的活動を測定し、不整脈や心筋梗塞の兆候を捉えます。超音波（エコー）検査では、心臓、肝臓、腎臓などの臓器の状態をリアルタイムに観察します。検査中は患者さんにリラックスして臨んでいただけるよう、声かけや環境調整にも配慮しています。

・輸血検査

輸血検査では、患者さんと輸血用の血液製剤が適合するか検査します。血液型検査や交差適合試験により、安全な輸血を実現し、副作用や拒絶反応を防ぎます。緊急時には迅速な対応が求められ、常に正確性とスピードの両立を意識しています。

・病理検査

病理検査は手術や生検で得られた組織・細胞を顕微鏡で観察し、病変の有無や性質を調べます。特にがんの確定診断には欠かせない工程であり、臨床検査技師は標本作製や特殊染色を担当し、病理医の診断を支援しています。また、手術中の迅速診断にも関わり、術式決定に貢献する重要な役割を担っています。

・微生物検査

微生物検査は感染症の原因となる細菌、ウイルス、真菌を検出し、同定する検査です。培養検査に加え、迅速診断キットやPCR法などの遺伝子検査も導入され、早期の感染症診断への支援体制が整っています。また、薬剤耐性菌（MRSAなど）の検出にも注力し、院内感染防止にも大きく貢献しています。

新型コロナウイルスとPCR検査

新型コロナウイルス感染症の流行により、PCR検査の重要性が急速に高まりました。臨床検査技師は、PCR検査機器の操作、検体の取り扱い、結果の解析までを担当し、感染拡大防止に貢献しました。コロナ禍では、検査数の急増にも迅速に対応し、24時間体制で地域医療を支えました。

コロナ以降、当院ではPCR機器の導入をさらに進め、対象疾患を拡大しました。現在では、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)、クロストリディオイデス・ディフィシル毒素(CDトキシン)、結核菌などの迅速検出にも対応しています。これにより、感染症の早期診断と適切な治療開始が可能となり、患者さんへの医療提供の質が飛躍的に向上しました。

今後も新たな病原体への迅速対応を目指し、検査技術の研鑽と機器の整備を続け、地域の皆さまの健康と安全を守る医療体制を支えてまいります。



遺伝子検査室とPCR検査機器



PCR検査(検体処理中)

チーム医療の中で臨床検査技師が果たす役割

現在の医療現場では、多職種が連携して患者さん一人ひとりに最適な治療を提供する「チーム医療」が重視されています。臨床検査技師も、その重要な一員として活躍しています。

感染対策チーム(ICT)では、微生物検査や薬剤感受性検査の結果をもとに、感染症の拡大防止や抗菌薬の適正使用に貢献しています。また、栄養サポートチーム(NST)では、血液検査データから栄養状態を評価し、患者さんの体力回復や生活の質向上を支援し、さらに輸血療法委員会では、輸血に関する検査情報を提供し、安全で適切な輸血医療を支えています。

臨床検査技師の検査結果は、チームの正確な判断と迅速な対応を支える大切な土台です。チーム医療の一員として、患者さんにより良い医療を提供していきます。

おわりに

臨床検査技師は、病気の発見から治療効果の確認、感染症対策まで、医療のあらゆる場面で重要な役割を担っています。皆さまが安心して医療を受けられるよう、日々、正確で迅速な検査を心がけています。臨床検査技師の仕事を、少しでも身近に感じていただけたなら幸いです。



連載

近隣保険薬局紹介コーナー

ヤマグチ薬局南台店 様



こんにちは。ヤマグチ薬局南台店です。相模原病院のバスロータリーの向かいに位置する薬局です。応需している処方せんは相模原病院が多数を占めますが、その他の医療機関の処方せんも受け付けております。ヤマグチ薬局は昭和58年に相模原市に創業して以来、地域に密着した調剤専門の薬局チェーンとして現在100店舗ほど展開しております。地域医療に貢献できることをモットーとしております。地域の皆様の健康を支える「かかりつけ薬局」として、信頼と安心をお届けしています。処方せんに基づいた正確なお薬の提供はもちろん、お薬に関する疑問や不安にも丁寧にお応えして、服薬管理や健康相談を通じて患者様一人一人の健康に少しでも貢献できればと考えております。待ち時間を短縮する為の処方せん事前受付や後日お薬のお届けなども行っており、忙しい方にも便利にご利用いただけます。昨今の薬の供給不足で、品薄の薬も沢山ありますが、手配可能な薬であれば取り寄せて、後日お届けもしております。また駐車場も2台ご用意しております。隣のタイムズとも提携しており、当薬局ご利用の方には2時間の無料券を差し上げております。待合室も広くとっており、バリアフリーなので車椅子のままでご来局いただけます。患者様の役に立つ薬局として努力していく所存です。どんなことでもお気軽にご相談ください。宜しくお願い致します。



【ヤマグチ薬局南台店】

営業時間

月～金 8:30～17:30

定休日 土日祝

電話：042-701-2230

FAX：042-701-2231

住所：〒252-0314

相模原市南区南台6-8-20



連載

近隣協力医療施設の紹介コーナー



**土日・祝日も診療可能
地域の健康を支える
みずじゅんクリニック**
院長
水上 潤哉 先生

みずじゅんクリニックは、相模原市緑区のアリオ橋本内にある内科・皮膚科・アレルギー科を中心とした地域密着型のクリニックです。大学病院などで総合診療を行ってきた経験豊富な医師、循環器内科専門医、皮膚科専門医や形成外科医が多く在籍し、健康診断、各種ワクチン接種をはじめ、内科(レントゲン検査、超音波、心電図検査など)・皮膚科処置(液体窒素療法、水イボ処置、局所麻酔による外科処置など)に加えて、一部小児の診療も行っています。

当院の特長は、土日・祝日も含めて朝10時から夜19時まで診療を受けられる点です。平日お忙しい方や急な体調変化にも対応しやすく、「困ったときにすぐ相談できるクリニック」として、地域の皆さまにご利用いただいています。

健康診断後の再検査(血球検査、肝、腎機能・HbA1c・コレステロール・中性脂肪など)では、検査機器を備えており、30分以内に結果が出るため、その日のうちに医師と結果を確認しながらご相談、治療を受けられます。

また、通院困難な方には訪問診療も行っており、外来から在宅医療へのスムーズな移行も可能です。法人内のもう一つの拠点「さがみはらファミリークリニック(中央区上溝)」と連携し、緑区・中央区・南区、さらに町田市等の近隣まで訪問診療をカバーしています。訪問診療では24時間365日、電話相談や臨時往診が可能な体制を整え、安心して在宅療養を続けることができます。

みずじゅんクリニックは、日々の健康管理から生活のサポート、そして人生の最期まで「そ

の人のらしさ」を大切にしたい医療を目指しています。

救急受診の受け入れ相談や、訪問診療を受ける患者様の入退院のご相談など、相模原病院との病診連携を密に行っております。

健康診断のご相談、訪問診療のご希望など、どんなことでもお気軽にご相談ください。



**医療法人社団はやぶさ
みずじゅんクリニック**

診療科目：外来(内科/皮膚科/アレルギー科)
予防接種 / 健康診断

内科 / 皮膚科	月	火	水	木	金	土	日
10:00~12:45	×	○	○	○	○	○	○
14:45~18:30	○	○	○	○	○	○	○

電話：042-812-5949

FAX：050-3458-0842

HP: <https://mizujun.org/>

住所：〒252-0146

相模原市緑区大山町1-22 アリオ橋本1F

アクセス：JR横浜線・相模線・京王相模原線
橋本駅 徒歩5分



【病院理念】



私たちは患者の皆さまの人権を尊重し、
十分な説明と同意に基づき、親切で心のこもった医療を提供します。

【基本方針】

1. 総合医療施設としての地域完結型医療の遂行
2. 地域支援病院の使命としての断らない救急医療の継続
3. 良質で安全な効率的医療の継続と低侵襲医療の拡大
4. 免疫異常（アレルギー・リウマチ）の高度専門施設としての診療、臨床研究、教育研修、情報発信
5. 病診連携・病病連携・薬薬連携の強化
6. 説明と同意（インフォームド・コンセント）の徹底
7. 情報開示の推進
8. 感染症や災害に強い診療体制の維持

当院のSNS

相模原病院ホームページ



YouTube
相模原病院



Instagram
看護部



産科



小児科



X (旧 Twitter)
小児科



2025年度
がんサロン
「クローバー」
予定一覧表

～がんサロンとは～
がん患者さんやご家族の方が集まり、
病気のことや生活のことなど思いを語り合う場です。
今年度からがん体験者が参加します。

参加無料
予約必要

5/28 (水)	1部：がんピアサポーターってなに？ 2部：フリートーク (※1部は職員も参加します)	乳がん体験者コーディネーター がん医療ネットワークシニアナビゲーター 村上利枝さん
7/23 (水)	1部：抗がん剤治療に伴う外見のケア 2部：フリートーク	がん化学療法 看護認定看護師
9/24 (水)	1部：椅子に座ってできる簡単な運動 2部：フリートーク	株式会社ルネサンス がんリハビリ事業
11/26 (水)	1部：がん患者が利用できる経済的の制度 2部：フリートーク	ファイナンシャル プランナー
1/28 (水)	1部：栄養について 2部：フリートーク	管理栄養士
3/25 (水)	1部：患者さんを理解し支える 2部：フリートーク	心理療法士

※内容に変更がある場合もございます。
※感染対策のため、予約制とさせていただきます。日程はホームページや院内掲示版などでご案内いたします。

【開催時間】 1部 13:00～13:45 2部 14:00～15:00 (途中入室・退室は可能)
【場所】 相模原病院 がんサロンの「クローバー」
【対象】 がん患者さん、ご家族の皆さん (当院への入通院は問いません)
【申し込み先】 下記の電話番号までお願いいたします (前日まで申し込み可能)

ご予約・お問い合わせ先
国立病院機構 相模原病院 がん相談支援センター
042-742-8311(代表) 月～金曜日 8:30～16:45
※参加にあたり、ご不明な点や心配な点がありましたら、お気軽にお問合せください

